

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 7 月 9 日現在

機関番号：12401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K20956

研究課題名(和文)震災遺構をめぐるケアツーリズムの社会学的研究

研究課題名(英文)A Sociological Study on "Care Tourism" Centered on the Visit of the Earthquake Disaster Ruins

研究代表者

高橋 雅也(Takahashi, Masaya)

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：00549743

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：震災遺構の見学を中心としたスタディツアーでは、被災当時の光景と現状との対比によって、共有困難な経験の絶対性を示唆しながら、それに圧倒されているばかりでない、災害と対峙する主体形成を促す被災経験の表象様式が見られた。そこでは連続性の断絶や現在への接続など、被災時と日常を一旦分離した後につなぐ作用が見られた。

このようなケアのツーリズムは、被災による感情経験や辛苦を表層的に理解した気にさせる「領有」を回避しながら、未来志向の問いを共有することで被災していない者にも当事者性を獲得させる「語り」を模索し、練成する真摯な実践によって成立し得ている点を明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義として、昨今盛んな震災遺構の見学を中心としたスタディツアーに代表される、本来ならば共有困難な感情経験や辛苦について、その埒外にいた者にも当事者性を獲得させる表象行為や語り部の「語り」をとおして、観光体験の提供者と来訪者がお互いの脆弱さとともに了解し合い、ねぎらい、いたわり合う観光様式を新たに「ケアツーリズム」として概念化した点を挙げることができる。またその内実の一端を分析的に記述した点も挙げられる。社会的意義として、そうした真摯な実践について、記憶の表層的な共有(=「領有」)や安直な市場化に与する取り組みとして矮小化する動向から擁護し、正当な評価を促すことができる点が挙げられる。

研究成果の概要(英文)：In a study tour centered on the visit of the earthquake disaster ruins, residents emphasize the destruction of daily life due to the earthquake. As a result, those who have not suffered tend to think that they cannot share the experiences of the victims easily. Nevertheless, they must learn about disaster in order to prepare for the disaster risk. Therefore, it is important to know that the earthquake is not just a past event, but directly related to the present life. In this way, providers of "care tourism" must avoid visitors from superficially understanding the experiences of the victims. To do so, it is necessary for the provider and the visitor to share the future-oriented thought and make the visitors think that the disaster is deeply related to themselves. The requirements for the establishment of care tourism are efforts by providers to increase the risk awareness of visitors, and consideration not to enforce such effects.

研究分野：社会学

キーワード：震災遺構 ケアツーリズム スタディツアー 感情経験

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

研究を開始した時点は、2013年11月に復興庁から「各市町村につき一箇所までを対象として、震災遺構の保存に必要な初期費用を支援する」との発表がなされてから3年ほど経過した頃であった。これをふまえて、各自治体で保存対象を選定する過程では、何のために保存するのかという目的論や、何の役立つのかという機能論が先行しがちであった。

しかし他方で、求められているのは一貫して価値論であったともいえる。どのような価値基準に照らして保存の意義を見出すのかという問題である。それは当時の根本復興大臣が「価値の合理性」の議論を各自治体で煮詰めて欲しいとも述べており、意見の集約が長引くことによるコストは復興交付金で対応した点にも表れている。このように、震災遺構が東日本大震災の惨禍を語り継ぎ、自然災害への危機意識を醸成する意義をもちうるという世代継承性をめぐる価値が問われ始めていたことが研究の背景にあり、これを核とした観光に「ケア」という価値を見出せるのではないかという仮説を検証したいというのが研究の動機である。

### 2. 研究の目的

東日本大震災の被災地において、震災遺構の見学を中心として、被災者との交流を通じた被災経験の共有や、震災の語り継ぎ/世代間継承を目的とする新たなツーリズムが展開しつつある。本研究では、こうした観光形態を従来のマスツーリズムに代わって拡大・浸透している着地型/体験型ツーリズムとみなした上で、一步ふみ込んで、人間存在の脆弱さ(ヴァルネラビリティ)を観光体験の提供者と来訪者が相互に了解し合い、ねぎらい、いたわり合う「ケアツーリズム」として概念化し、詳細に記述していくことを研究の目的とする。

その際、主としてスタディツアーに参加する人々の主体像に注目しながら、提供者と来訪者(ツーリスト)にとって「ケアツーリズム」はいかなる経験と言えるのか、とりわけ被災経験にともなう形容しがたい絶対的な喪失感や痛み/苦しみはいかにして相対化、客体化されるのかについて問い、明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

調査対象として、「宮城県仙台市立(旧)荒浜小学校」と「宮城県石巻市立(旧)大川小学校」を取り上げて、現地で提供されているスタディツアーの参与観察を行った。その際、第一に震災伝承施設における展示や語り部による「語り」に注目し、被災経験の表象をめぐる実相について分析した。第二に、スタディツアーの提供者と来訪者の相互行為に注目して、被災経験に関する事実認識や感情経験をどのように伝達/解釈することで共有し、ケアのコミュニケーションを成立させていたのかについて分析した。

### 4. 研究成果

#### (1) 新たな観光形態への視角

本研究では、並行した理論的考察をとおして、震災遺構の見学を中心としたスタディツアーという新たな観光形態の検討に有効な分析的視角を明らかにできた。

スタディツアーの提供者に注目すれば、被災経験の表象行為をとおした被災者における当事者性(「なぜ他ならぬ自分が語るのか」)やアイデンティティの揺らぎ、そして容易に客観視できない感情経験を客体化する過程に焦点を当てることが肝要である。他方、スタディツアーの来訪者に注目すれば、安直な「記憶の領有」を拒絶するような当事者の痛みや辛さを共有することを通して、共在感覚(同時代を生きる者として共に在るという実感)を獲得していく過程の精査が不可欠である。

これらの知見を導出する上では、近代観光の成立と展開をめぐる史的変遷の延長上に、こんにち新たに立ち現れている観光形態を定位する理論的射程を持つことが必要となり、ジョン・アーリによる観光社会学の所論を批判的に検討した。

同氏は資本主義分析を研究上の起点としており、その著作『観光のまなざし』を端緒として、組織資本主義から脱組織資本主義に至る移行過程で、観光の変容を把握している。すなわち、経営組織の安定と自己保存を目的として、労働者の福利厚生の一環ともいえる大衆観光を促してきた19世紀後半から、情報社会における資本のフレキシブルな蓄積による職業構造の変化で、従来は集会的であった観光の個人化が進む20世紀後半から現在に至る過程において、観光動向の変化を跡付けている。

あわせてアーリは、広範な社会領域で進展する移動の高速化によって、新しい社会生活のパターンが現れており、ヒト・モノ・イメージの移動が観光経験の再編成を促しているという。さらに、グローバル観光がもたらすローカルな帰結というべき「文化の商品化」のもとでは地域文化が商品価値の有無/高低で選別されて、アイデンティティは揺らぎ、現地住民の日常生活にまで、同様のまなざしが向けられている動向を批判する。そして、ホスト-ゲスト関係において観光の提供者が感情労働を強いられる傾向を指摘した上で、そのことに十分配慮できる移動の倫理が求められると喝破している。

他方でアーリは、一般的に言われるような個人の愉楽や経済効果、産業の活性化などの経済的効用以外にも、観光の社会的効用にも注目しており、昨今のモバイル社会における人間関係の変容に対抗して、観光という移動の実践が人びとの弱い紐帯を活性化したり、共在感覚を高めたりする可能性を肯定的に評価している。

以上より、スタディツアーの提供者におけるアイデンティティの揺らぎや、感情経験の客体化に注目すべきこと、そして観光にともなう移動の倫理として、他者への配慮をもつ来訪者が痛みや辛さの共有をとおして共在感覚を高める過程に照準すべきとの方法論的な知見を抽出することができた。

## (2)被災経験の表象をめぐる諸相

東日本大震災の震災遺構（および震災伝承施設）において、スタディツアーの来訪者が実際に目にする甚大な被害を受けた校舎や展示物・看板をとおして、被災経験がどのように表象されているのかについて、また来訪者がそれをどのように解釈／受容するのかについて具体相を探るために、調査対象となった「宮城県仙台市立（旧）荒浜小学校」、「宮城県石巻市立（旧）大川小学校」の保存のあり方、校舎内の展示内容／方法を調査するとともに、来訪者らが見学する様子などにも注目しながら調査をおこなった。

### 宮城県仙台市立（旧）荒浜小学校

荒浜小学校は海岸から約700m内陸部に立地しており、周辺には津波で家屋等が押し流されて基礎だけ残されている状態が散見される他、東日本大震災慰霊之塔及び荒浜慈聖観音が建てられている他、死者に呼びかけるように周囲に響き渡る「記憶の鐘」も設置され、来訪者の多くが同ルートを辿りながら当事者の被災経験に思いを致し、各人各様の慰霊を行う「記憶の場」となっている。震災当日には10メートルを超える津波が押し寄せた荒ぶる海、しかし今は静かな海を前にして、来訪者は一様に黙して祈りを捧げていた。

また、荒浜小学校旧校舎は、屋上に避難した住民全員が救助された経緯から、また多くの卒業生を送り出した学び舎という含意からも、「ありがとう荒浜小学校」の看板とともに感謝の対象として保存されていることが確認できた。ガレキ等は安全・衛生上の理由から、当然ながら撤去されているが、昇降口や教室、階段の各所には被災当時の状況を伝えるパネル（写真と解説）等が設置されており、いずれも学校生活の日常と震災当日の連続性の断絶と表現しうる実態を伝える内容になっている。校舎の壁や校内の廊下や天井に残された痕跡が津波の到達した高さを示しており、それらをもとにして、来訪者は机・イスのない空の教室等をのぞき込みながら、そこに当時の混乱や惨状を読み込んでいく。

くわえて指摘すべきことは、校舎内に見学経路が定められており、来訪者は上記のような被災の実態を伝える展示を見学した後、今を生きる者に残された記憶の継承という課題を示唆する展示へと進むように構成されている点である。津波の襲来と避難行動を時系列で整理した分析的記述による展示のほか、被災以前の荒浜地区を模したジオラマ（「失われた街」模型復元プロジェクト：神戸大学槻橋研究室）、災害への日常的な備え等に関する展示は、荒浜の歴史を語り継ぐこと、それを現在へと接続／着地させていくことを意図しており、このような来訪者の災害学習を通して旧校舎を「震災遺構」たらしめている点を明らかにできた。

上述の連続性の断絶や現在への接続／着地は震災遺構の随所に見られ、津波が平穏な日常を切り裂いて襲来した災禍であったことを伝える、「思い出いっぱい場所が瓦礫の山に」（施設内の表示）などの文言のように津波が時間の流れや蓄積を寸断するものであったことを強調した表現が数多く確認された。また、体育館跡の案内板には2010年のチリ地震津波の経験を活かして避難場所を体育館から屋上に変更しておいたことが奏功し、東日本大震災では多くの命が救われた旨が記されており、防災対策の更新の重要性を伝える展示が散見された。

さらに、被災後の新たな取り組みとして、荒浜小学校の児童が作成した「あらはまカルタ」が展示されていた。これも現在への接続／着地であり、津波被害だけで語られるべきではない、多面性と厚みをもった荒浜の魅力や歴史を再提示する内容になっていた。他にも「失われた街」模型復元プロジェクトの成果物が展示されており、同プロジェクトが神戸大学の学生によって推進されていることを記した説明書きが、「被災」という共通経験が人々を結びつけ、郷土史の再生へと向かわせることを伝えていた。

総じて、被災当時の光景と現状との対比によって、容易に共有できない経験の絶対性を示唆しながら、それに圧倒されて立ち尽くすばかりではない、災害と対峙する主体の形成を促していく被災経験の表象様式の特性が析出された。

### 「宮城県石巻市立（旧）大川小学校」

被災経験の表象のあり方について考える際には、震災遺構の中でも大川小学校がもつ特異性を考慮する必要がある。すなわち、被災時に適切な避難行動がとれていれば、助かった児童や教職員が多かったのではないかという、訴訟にも発展した論争的な性格を帯びた震災遺構であり、その検証の場を訪れるという意味合いを持っている点である。その意味で、津波の爪痕が剥き出しのまま残された旧校舎を案内する場面で、語り部がそうした論争的な側面にほぼ言及しないことは抑制的な表現として映じるものであった。

2階の教室では床が津波に押し上げられていたほか、壁には津波の到達時間で止まった時計が掛かっており、8メートルにも達した津波は天井にくっきりとした跡を残していたが、それが何なのかを説明する以外の「語り」は行われない。校舎2階と体育館をつなぐ渡り廊下は川からの津波で押し倒され、ねじ切られており、校舎側の出入り口は壁面に大きな穴を開けている。ここでも特段の解説はないが、来訪者は開口部分に一瞥をくれるだけでも、それがいかに異常な事態

なのかが分かるという具合であった。整備着工前の震災遺構には、被災経験の表象行為そのものを退けるほどの説得力が具備されていることが確認できた。この点では、荒浜小学校は来訪者の安全に配慮して整備された震災遺構であり、生々しい震災の痕跡は相対的に見出しにくいものになっていた。同様の課題に大川小学校の旧校舎も直面することになる。まさにそこにおいて、被災経験とその辛苦、継承したい思いを提供者（語り部）がどこまで表すことができるかという伝達可能性、来訪者がそれらをどこまで受けとめられるかという受容可能性が問われてくるのだと考えられる。こうした震災遺構の整備前／整備後における、被災経験の保存・継承をめぐる問題構制の差異に関する研究蓄積は乏しく、一定の意義ある知見を示すことができた。

### (3) 提供者と来訪者の相互行為

上記のようなスタディツアーを通して、提供者と来訪者の相互行為がどのように展開され、これをケアのツーリズムたらしめていたのだろうか。この点については、主として大川小学校の事例において検証することができた。

校庭脇にある野外ステージを案内する際には、語り部はコンクリートの壁に書かれた「未来を拓く」という文字に言及しながら、「私たちは子どもたちが生きたかった明日を生きている」という内容を語っていたが、来訪者はそこに込められた「ここは未来に向けて、小さな命や学校のあり方を問い直していく場所である」という意図を汲み取り、語り部のもとに「私にとってこの場所は未来を拓いてくれた場所です」という声が寄せられている（『小さな命の意味を考える（第2集）』P45）。

こうしたコミュニケーションは、来訪者たちが語り部とともに校舎の裏山に上がった際には、この避難経路の安全性／有効性と、この経路が被災時に選ばれなかったことへの憤りを口々に述べていた点からも確認できた。語り部は来訪者にそのような反応を決して無理強いすることはないが、語り部は賛意を示す来訪者らの様子に意を強くして、石巻市教育委員会の対応に疑問を投げかけていた。と同時に、この避難経路と非難スペースがどれだけ安全かを伝えてもらえるよう情報発信を促しており、来訪者は一連のメッセージに共感的に耳を傾けていた。

ただし、そこで印象的であったのは、この場所から遠く北東の眼下に望める北上川へと来訪者の視線を促しながら、語り部が「ちょうどあのあたり（河口近く）に白波が立つと、子どもたちはそれを見て、『海が荒れるぞ』とか言ったものです」、「それも今では高い防潮堤で、見えなくなっていました」と語ったことである。そして、「水道が寸断された時はしばらく復旧しなかったが、湧き水は問題なく使えた」という話もしていた。これは明らかに、第一に子どもたちが自然への観察眼や洞察力、知恵をもっていること、第二に近代的なシステムの脆弱性に対する批判、第三にそうしたシステムに依存して自己判断できなかった学校現場に対する批判、第四にそれでもなお防潮堤という人工物で自然災害を制御しようという発想の貧困さに対する批判を意図した「語り」であった。このような非常に達意な語り口に対しては、来訪者はただ不条理を嘆くでも憤るだけでもなく、エピソードを聞きながら大きな問いに誘われていた。

このように震災遺構をめぐるスタディツアーでは、被災にともなう感情経験や辛苦を表層的に理解した気にさせる「領有」を回避しながら、未来志向の問いを共有することで被災していない者にも当事者性を獲得させる「語り」を模索し、その練成に取り組む真摯な実践によってケアのツーリズムとして成立し得ている点を明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 高橋雅也	4. 巻 15
2. 論文標題 観光社会学の理論と展開 ジョン・アリーの所論と観光地域づくりへの示唆	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 西日本社会学会年報	6. 最初と最後の頁 33-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高橋雅也
2. 発表標題 震災遺構の保存運動と合意形成 いわき市薄磯復興協議委員会の取り組みを事例として
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 高橋雅也、伊豫谷登士翁、テッサ・モーリス=スズキ、吉原直樹、飯笹佐代子、伊藤美登里、辛島理人、笹島秀晃、高野麻子、武内進一、松本行真、望月美希、山岡健次郎、山脇千賀子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ハーベスト社	5. 総ページ数 268
3. 書名 『応答する 移動と場所 21世紀の社会を読み解く』担当章「変容するローカル・ノレッジ サービス貿易としての観光」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----